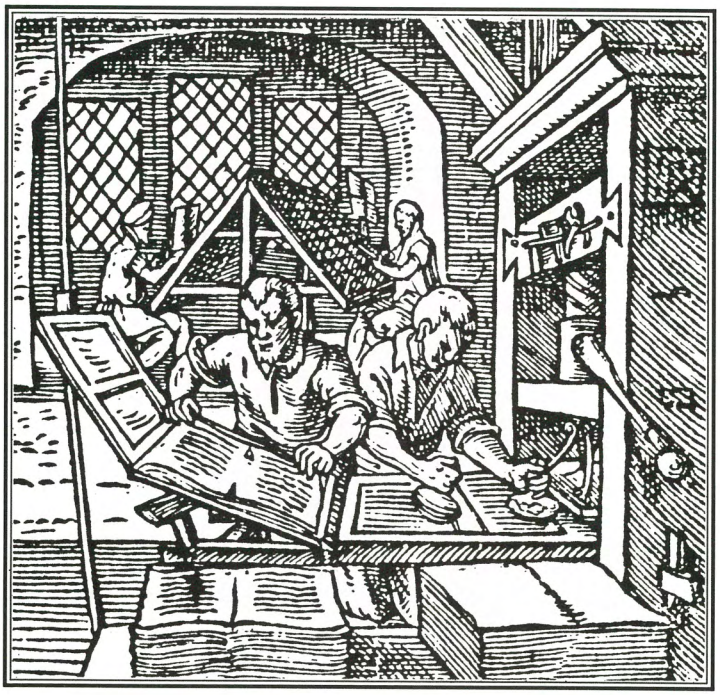
大学出版

'95 夏

No. 26



大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses

大学出版部協会

大学出版
26号

Summer・1995

読書の周辺　「坊っちゃん」を読む　――――――　森下　恭光　1
●教師の表と裏

読書の周辺　北欧の読書事情　――――――　岡沢　憲芙　6
●平和にまさる資料保存法なし・国際国家スウェーデンの経験

第13回韓日大学出版部合同セミナーに参加して　――　崔　在　順　11

歩く・見る・聞く―知のネットワーク　1　――――――　14

大学出版部ニュース　――――――　16

新刊案内'95・4～'95・6　――――――　24

製作の現場から　11　――――――　表3

表紙イラスト　ヨースト・アマン『職人図鑑』より
大学出版部協会マーク・デザイン　道吉　剛

■読書の周辺

「坊っちゃん」を読む

●教師の表と裏

森下　恭光

漱石の「坊っちゃん」ほど多くの読者を持つ作品は、きわめて少ないであろう。

年齢的にも階層的にも、職業的にも、読者を遠ざける要素が少ないということや、内容が平易で明快であるということも、多分、多くの読者を持つ理由になるであろう。

ところで、私が今回、「坊っちゃん」をとりあげた理由であるが、それは、大学で教職課程を担当する教員として、教師の現実と理想ということを絶えず意識せざるを得ない立場にある者として、「坊っちゃん」は、そのことを考える好材料を提供してくれると思うからである。副題に記した教師の表と裏は、教師の理想と現実という意味にもなる。

そこで、順序として、「坊っちゃん」の成立過程と、その背景をはじめに概観しておこう。

小説「坊っちゃん」は、明治三十九年四月に俳句誌「ホトトギス」に掲載された。同誌上には、「我輩は猫である・第十」も同時掲載されている。この作品を発表した時の漱石は、未だ職業的作家ではなく、東京帝国大学英文科講師と第一高等学校講師を兼ねる学校教師であった。

学校教師を本業とするならば、作家活動は副業であろう。しかし、この頃の漱石は、本業に対して強い愛着を持ってはいなかった。

とくに、大学講師については、友人や門下生に宛てた手紙の中で、「学校を辞職したくなった」とか、「大学がいやになって仕舞った」と書くことがある程、気に染まないものを感じていたようだ。

これを象徴するかのように、明治三十九年二月には、大学から委嘱された英語学試験委員を辞退している。

このような時期に執筆された作品であったことを考えると、「坊っちゃん」が大学や高等学校教師ではなく、中学教師という設定ではあるにしても、その職場が学校であることから、内容の展開が学校批判や教師批判になっていることは当然であるとはいえないまでも、深い関係がありそうである。

さて、「坊っちゃん」の舞台は、いつからか、愛媛県の松

山であるとされている。そして、勤務先の中学校は、愛媛県尋常中学校（現在の松山東高等学校）であるとされているのである。

これは、漱石が、明治二十八年四月に、前任校の高等師範学校を辞し、愛媛尋常中学校に赴任したという事実から、作者のかつての勤務地、勤務校がモデルであるに違いないとする短絡的ながら自然な推理の結果であるといえよう。

経験した時点と創作の時点との間には、約十年の時間的隔たりはあるものの、学校という職場で働くかたわら創作活動にも相当のエネルギーを費やしていた最中の彼にとっては、学校やそこで教育に従事する教師というものについて、書かずにはいられない衝動とでもいうべきものが高揚していたと考えられる。

この作品を発表した翌年（明治四十年）には、一切の教職を捨てて朝日新聞社に入社し、職業的作家になっていることを考えると、学校・教師というものへの訣別を意味するものがあったかも知れない。

さて、「坊っちゃん」の内容に入って行こう。主人公の中学教師は、東京という大都会の出身で、学歴は物理学校（現在の東京理科大学）を卒業したことになっている。数学の教員資格があることから格別の理由もなく四国の中学校の教師になる。

ここで、主人公「坊っちゃん」と作者の類似点を探すと、双方ともに東京出身の、いわゆる「江戸っ子」であるということと、性格的に倫理的潔癖感が強く、「腕白者で喧嘩がすき」というところである。

一方、双方の違う点としては、まず学歴と経歴の違いを指摘しなければならない。学歴は、いうまでもないことながら、漱石は、帝国大学文科大学英文科を卒業した文学士であった。一方の「坊っちゃん」は、専門学校に属する物理学校の卒業である。

経歴は、漱石が高等師範学校の英語教師を経て愛媛県尋常中学校に英語教師として赴任したのに対し、「坊っちゃん」は、物理学校を卒業すると同時に四国の中学に数学教師として赴任している。

このように学歴・経歴ともに異なることを知るならば、直に「坊っちゃん」のモデルを漱石そのひとと考えるような安易な推測は根拠を持たないことがわかる。

しかし、先にも指摘しておいたように共通点はあるし、赴任早々に校長との間に交わした挨拶に至っては、ほとんど同じであったことを知るならば、漱石が特別の思いを込めて「坊っちゃん」の人物像を造形したであろうことは想像に難くない。

その挨拶とは、「坊っちゃん」が新任校の校長（あだなは狸）が、教育の精神について長談義をするのに閉口し、とてもこのような学校には勤まらないと思い、思い切りよくことわって帰ってしまおうと思い「到底あなたの仰やる通

りにや、出来ません、此辞令は返します」というものであった。

このやりとりと、ほぼ同じやりとりを、漱石は高等師範学校の校長（嘉納治五郎）との間に交わしている。

新任の夏目金之助（漱石の実名）に対して、校長の嘉納治五郎は、「高等師範は、学校の先生になる人を教育するところだから、教師の責任は重いのだ。夏目君も教育者として、生徒の模範になるようにやってくれたまえ」と注文した。

これに対して、彼は、「私はいたらない者ですから、とてもそういう注文どおりにはいたしかねます。おことわりします」といったということは、後に「私の個人主義」と題する講演の中で告白している。

「坊っちゃん」の気風からすると、校長に対して彼が吐いたことばは、ごく自然であるし、漱石の気風からしても、校長の嘉納治五郎に返したことばは自然であった。

そうして、「坊っちゃん」は先にも記したように、格別の理由もなく教師になった。同じように、漱石も、特に望んで教師になったわけではなく、いわば成り行きで教師になった。そういう意味では双方とも、一種の「デモシカ先生」であって、教師としての自覚や使命感は、少なくとも当初においては希薄であったといってよいであろう。

さて、いよいよ教師になってみると、「坊っちゃん」は今まで経験したことのない職業人としての生活を体験することになる。

東京から地方都市へ来たことでさえ、違和感をおぼえるのに加えて、教師という特殊な職業人で構成されている学校という社会、とりわけ、教師どうしの人間関係ともなると、別世界の出来事のように感じられるほど奇異な様相を示していたのである。

彼の眼から見ると、校長は事大主義者で、いわゆる本音を吐かない「狸」であった。

教頭は文学士で学歴は立派だが、年中フランネルの赤いシャツを着ているという「赤シャツ」である。顔色の悪い英語教師の古賀は唐茄子の「うらなり」。数学主任の堀田は、「叡山の悪僧」のような面構えで「山嵐」。職場上司のご機嫌取りに精を出す画学教師は、「のだいこ」。これら、第一印象をもとにしてつけたあだ名は、言葉あそびであるはずのものであるが、「坊っちゃん」のばあい、もちろん、あそびの要素はあるにしても、あだなで全人格をとらえた気分になっているところが幼稚であり、危険でもある。

人間関係は、それがどのようなものであれ最初は、第一印象から始まるのは事実である。

しかし、人間関係は動的なものであり、状況の変化によって、人間関係そのものも変容して行くものであるはずであるが、「坊っちゃん」には、状況の変化による人間関係の変容は、起り得ないものと考えられているかのように見える。

そればかりではない。人物評価に際し、「清」という奉行人のいうように「真っ直でよい御気性」の「坊っちゃん」は、自己を基準にして、他人への仮借のない評価を下してゆくので、彼の前に現われる人物は、彼の「好悪」によって明確に二分されるのである。

いわゆる「善玉」と「悪玉」の二種類に色分けされてしまうのである。

ちなみに、「善玉」は、「清」を除けば、「山嵐」と「うらなり」であり、「悪玉」は、「狸」、「赤シャツ」、「のだいこ」ということになる。

しかし、いくら小説であるにしても、人間を「善玉」と「悪玉」に二分して、人間関係を「善玉」が「悪玉」を懲らしめるという構図が最良と考えるのは単純すぎる。

作者の漱石は、もちろん、人間を「善玉」と「悪玉」に二分して裁断する程単純な倫理主義者ではない。

「善い人」と「悪い人」と簡単に色分けできるほど人間は単純でないとの人間観は、大正三年に発表した「こころ」の中で、「先生」に述懐させていることでもわかることである。

しかし、なぜ、学校教師を主人公とする「坊っちゃん」が勧善懲悪の色彩を濃厚にしているのかを考えてみると、明確な理由がそこにあるように思われる。

明確な理由とは、教師という聖職者が構成しているのが学校という社会であるならば、当然、そこは理想的社会であるはずである。

ところが、ひと度教師を内面から観察すると、本来人間である教師は、人間としての弱さ、愚かさ、醜さを内包していることがわかる。

にもかかわらず、社会的期待としての聖職者の立場を外に向けてはとりつづけなければならない。その矛盾に悩むというのが人間としての教師の実像であるはずである。しかし、現実には、教師は相変わらず、矛盾を感じることもなく、外に向かって虚像ともいうべき聖職の顔を見せつづけている。この事実は、内部から外部へ向けて知らしめる必要がある。

このように考えるところのあった漱石が、あえて勧善懲悪小説の形をとって、学校という社会には、一般の社会と同じように、「善玉」もいれば「悪玉」もいるということを知らしめるために、このような小説を創作したというように私は理解するのである。

「坊っちゃん」に描かれている教師の世界には、常に表と裏があり、教師が公的場面で見せる姿を表の姿とすれば、私的場面で見せるのが裏の姿である。

先に記した「善玉」と「悪玉」という色分けによって、この表と裏の姿を見るならば、「善玉」は、表と裏の姿が同一である。それに対して「悪玉」は、表と裏の姿が異なる。

具体的人物をあげていうならば、「善玉」の数学教師堀

田は表と裏が同じである。つまり、公的場面での言動と私的場面での言動との間に矛盾がない。「バッタ事件」（宿直の夜寝床にバッタ《イナゴ》を入れられた事件）に関する生徒の処分問題で、堀田が厳罰主義を主張したのは、日頃の彼の教育姿勢と一致している。

それに対し、「悪玉」の教頭「赤シャツ」は、公的場面での言動と私的場面での言動が一致しない。表と裏の間に矛盾がある。「バッタ事件」に関する生徒の処分問題で、彼は穏便派に立ち、教師の徳化が生徒に及んでいないことに原因がある、と生徒を弁護する。

この発言は、教頭の発言として至当なものであるが、問題は、当の教頭の私的場面での言動が矛盾のないものであるかどうか、ということにある。

「マドンナ」をめぐる男女間の問題で、「うらなり」に対して教頭の「赤シャツ」がとった態度は不公正なもので、このことに象徴されるように「赤シャツ」は、公的場面での言動と私的場面での言動が一致しない。

作者の漱石は、いうまでもなく「善玉」の側に立つ。しかし、無条件にそうするわけではない。

もともと、人間を「善玉」と「悪玉」に二分することに無理があることを承知の漱石は、「善玉」と「悪玉」の対決場面において、完全なる「善玉」の勝利とか、完全なる「悪玉」の敗北を描いていないことにもそれがあらわれている。

「マドンナ」をめぐる問題や、師範学校生と中学校生の衝突時に起こった「山嵐」の暴力事件に対する「赤シャツ」の対応に憤慨した「山嵐」が起こした「赤シャツ」制裁事件の結末は、けっして、「山嵐」の勝利とはいえないものである。

一方で、愛媛尋常中学校時代の漱石は、「坊っちゃん」そのままの粗放な教師ではなく、比類ないほど卓越した語学教師であったことを、当時の教え子である眞鍋嘉一郎は述懐している。

ここにも、創作としての「坊っちゃん」と現実の教師夏目金之助との違いはある。

以上、「坊っちゃん」を読むことを通して、読者としての私が考えさせられることを記して来たが、次のようなことを結論として、この小文を締めくくりたい。

「坊っちゃん」によって漱石が読者に訴えかけているものは、人間や人間社会には、表と裏がある。つまり「公」と「私」の姿がある。できることなら、「公」の姿と「私」の姿は同じでありたいが現実はそうはゆかない。

それに、実際問題として「私」の姿だけで世の中を渡るのは社会人として適性を欠くことになる。教師と学校のありようもこのことと同じである。「公」だけでも駄目であるが「私」だけでも駄目であるということになるのであろう。

（明星大学人文学部教授）

北欧の読書事情

●平和にまさる資料保存法なし・国際国家スウェーデンの経験

岡沢 憲芙

どんな小さな地方都市でも充実した図書館が

旅行や所用で外国にでる機会があると、可能なかぎり、首都、プラス地方都市を日程に入れることにしている。首都はどこでも同じようなものである。洗練された国際空港、そびえ立つ官庁街のビル、整備された公園・幹線道路、大劇場、博物館、美術館、オペラ・ハウス、外国の大使館、偉容を誇る国会議事堂、早朝のジョギングコース、それに地下鉄……。あらゆる英知・工夫を傾け、全エネルギーを投入してこれでもかこれでもかと厚化粧を凝らしている。まるで国家の威信を誇示しようとする広告塔である。ところが、首都の豊かな生活環境に接した後で、ホンの少し、地方に行くと、首都との落差があまりにも大きくてウンザリすることがある。「本当にこれが同じ国なのだろうか。経済大国か」。あるにはあるがなかなか使う気にはなれないトイレ、あるにはあるが車道と識別できない歩道。公共建造物や道路案内がドメスティック表示だけ、外国人用の地図もないことがある。首都を離れてみるとその国の豊かさ・ユトリ・多様性がどの程度のものか測定できる気がする。

スウェーデンの地方都市を訪問する機会があれば、是非、図書館を覗いて欲しい。どんなに小さな街でもその図書館の充実ぶりに驚かされる。そこには、一〇か国語近い語学で図書館利用案内が用意されている。その中には、かなりの語学好きでも何語であるかさえ判定できない言語が含まれているハズ。もちろん、スウェーデン語以外の図書も並べられている。地域図書館を草の根国際交流の拠点にしているようである。多くの公的機関（例えば、警察、病院、市役所など）と違って、図書館なら恐怖心や警戒心なく接近できる。国民図書館運動の長い伝統もある。草の根インターナショナリズムの拠点にはうってつけである。そういえば、この国には世界の一五〇か国からの市民が生活しているというし、全人口の約九％以上が外国にルーツを持つ市民ともいわれている。かつては、貧しさゆえに職と食を求めて膨大な移出民を出した国である。文字どおり、

「移民を出す国」から「移民を受け入れる国」に変身した。高速度国際化の実験例でもある。

国際化とはなにか。それは、何よりも「人・モノ・カネ・情報・サービスの国境線を越えた相互作用が頻繁化すること」。だが、それだけではない。「同時代を生きる地球人としての共通のゲームのルールが定着すること」である。「連帯と参加を通じて、常識が共有されるようになること」と言い換えても同じである。

地球市民権の試み

九四年の夏、スウェーデンは二〇〇年ぶりの猛暑であった。シベリア経由でアジアの貧乏学生が初めて北欧を訪問してからほぼ三〇年間たつが、まさかと思った。こんなことがスウェーデンで起こるとは想像だにしていなかった。あの北欧で、水着を買い、近くのメーラレン湖で泳いだのである。ムシ暑い梅雨時の日本を避けて涼みに来ることはあっても、泳ぎに来ることがあるなんて思いもよらなかった。

だが、さすがの猛暑も、終われば早い。秋が駆け足で訪れる。秋の気配が朝夕に顔を見せ始める頃、選挙の年なので、各家庭に各党のパンフレットと投票用紙が配られる。九か国語か一〇か国語で印刷された選挙案内も。この光景は感動的ですらある。一九七六年以後、スウェーデンは在住外国人にも地方選挙の選挙権と被選挙権を与えている。条件は一八歳以上であること、過去三年間スウェーデンに住んでいること。現に、外国籍のまま選挙に参加したり、政治家になったりしている。国籍よりも「いま現実にどこに住んでいるか」を優先させたこの判断は見事である。

一方、わが国では「国際化」とか「世界の中の日本」というフレーズは頻繁に使われるのに、その割には自分たちが国際国家に生活しているという実感はない。ソトの評価ばかりを気にしたソト向けの国際化は国際化の一つの側面。それに劣らず重要なのは、ウチを見つめた国際化。現に、在住の外国人が数多くいるのに、在住外国人環境は整備水準が低い。ソト向け国際化とウチ向け国際化を同時に進めなければ、国際社会での信頼などおぼつかないであろう。国際世論のブーメラン効果を真剣に検討する必要がある。

六〇年代に世界を放浪した貧乏学生がストックホルムにたどり着き、そこで快適な青春を経験した。北の外れの福祉国家は魅力的であった。まさかまさかであった。「北極圏に近い極寒の地にこんな物質文明の花が咲くハズがない」。素朴ではあるが華麗でウルトラ豊かな社会があった。驚くほど寛大に貧乏学生を受け入れてくれた。やがて、彼らは感激と感謝の念を抱いて世界中に戻っていった。好感度の高い情報が発信された。

スウェーデンの在住外国人環境

①住宅・福祉・教育ではスウェーデン人と同じ権利
②連帯賃金制（同一労働・同一賃金）と労働訓練の平等
③スウェーデン語学習機会の提供

④母国語学習機会の提供
⑤複数言語による情報提供
⑥通訳使用申請権
⑦地方公務員就職権
⑧地方議会への選挙権・被選挙権
⑨国民投票権
⑩民族差別オンブズマン制度

暗くて、寒くて、長い冬

こうした一覧表を見ているともう国家としての風格の問題である。ところで、スウェーデンを読み込もうと思って、通い始めた頃から、困ったことが起こった。膨大な資料がそのまま保管されていることである。ナポレオン戦争以来約一八〇年間にわたって平和を維持してきた国である。とにかく貴重な資料の消滅や海外流出が避けられた。そのまま全国の図書館や古書店に保存されている。平和の継続は研究者泣かせになる。日本でなら直ぐに貴重本と分類されて倉庫の奥深くに保管されそうな膨大な古資料が簡単に手に入ってしまう。「古資料がライブで活用できる！」。これは嬉しい驚きであった。「平和にまさる資料保存法なし。戦争にまさる資料破壊なし」である。

読書への関心は高いが図書消費人口の絶対数が少ない国では、どうしても本の価格が高くなってしまう。それを補完するのが古書店と図書館ということになる。古書店については丸善新書の『世界の古書店』で紹介した。ここでは、図書館に絞って話してみたい。

これも社民党がスタートさせた実験であるが、国民図書館運動の長い伝統があるため、また、スウェーデン人の本好きと分類好きは定評があるため、一度テーマが決まると情報へのアクセスはごくごく簡単。既に述べたように全国いたるところに公共図書館と専門図書館がある。前者は国民図書館運動の成果であり、後者は平和の継続が自動蓄積した成果である。

ストックホルムのような小さな都市にでも合計四六の公共図書館がある。多くの日本からの視察団にとっては、これはちょっとした驚きであろう。もちろんこのほかにも各種の専門図書館が数多くある。先に紹介したように、平和の継続で、膨大な資料が残ったこと。スウェーデン人の観察・分類・模写・保存好きが、保存・保管システムの開拓・改良に拍車を掛けたこと。それに、国土が広大で家屋事情に恵まれているため、引っ越しの度に膨大な資料を泣く泣く放棄しなければならないということがないこと。そしてまた、時間が十分にあること。有給休暇は長いだけでなく完全消化が原則。その上、ただひたすら長い冬。情報の収集から保存までの情報過程を、家庭レベルで組織レベルで充実でもしなければ、とても長い冬を過ごせない。その他の選択肢としては悪名高いアルコールへの過剰依存か、これもまた世界的に名高い継続度の低い男女関係への参加くらいしかない。前者は可処分所得の低い国ではそう毎日と

右上　ストックホルムの中心街にある王立図書館
右下　ミレス・ゴーデン
左上　故パルメ首相の墓の前に立つ筆者

はいかないし、下手をしてうっかり度を超すと、酔いのあまり、眼下の雪をめがけてファイナル・ジャンピングという事態にもなりかねない。後者については、ゲームの参加者に限りがあるし、そんなに続くものではない。筆者の見る限り、いくらなんでもそろそろ限界で、むしろ最近は保守的なムードが濃密になっている。つまり、ファースト・エンカウンターには慎重になっており、それ目当ての旅行者を失望させている。そうなると長い冬のお相手としては情報処理ゲームが最後の到着点ということになる。

話しかけ、書きまくり、実行していく政治家たち

筆者が頻繁に通ったのは労働運動図書館・資料保存所である。スウェーデン労働運動の拠点であり、四四年にわたる社民党長期政権を支えた政策シンクタンクである労働組合全国組織ＬＯの本部の隣にある。ここは社民党や労働運動の研究者には情報の宝庫である。『スウェーデンの挑戦』（岩波新書）も『スウェーデンは、いま』（早稲田大学出版部）も、それに『スウェーデン現代政治』（東京大学出版会）も、基本的には、ここで生まれた。

結党期の社民党を指導し、福祉社会建設の最強のモーターともいえる労働組合全国組織を結成・指導したのがヤルマール・ブランティングという名政党政治家である。後発工業国家・スウェーデンにおける社民主義運動を、「平和主義・議会主義・協調主義」でまとめあげた彼の忍耐強い努力がなければ、時おり爆発の兆しを見せていた過激な

急進主義に直撃されて、その後の長期政権など夢想だにできなかったのではないか。福祉国家建設を思念する政治的情熱は、その一方でどこまでも冷徹な合理主義を長い旅のパートナーとして要求することを教えてくれた。彼の全体的な行動は演説・草稿集“Tal och skrifter”全一一巻に収録されている。

ストックホルムでは彫刻家カール・ミレスのアトリエがそのまま美術館になっているミレス・ゴーデンのテラスで読書をすることが多い。この美術館は日本からの旅行者にはあまり馴染みがないが、少し多めに時間がある旅行者ならぜひ訪問して欲しい。地下鉄とバスを利用すればすぐに行ける。リディンゲという典型的な中産階級の住宅地にある屋外の彫刻美術館である。ミレスの作品が最高の陳列場所を得て、見事に呼吸している。時には吸い込まれそうなスカンディナビアン・ブルーを背景にしているときには、一つ一つの作品がいまにも動き出しそうに感じる。美術館からの展望も読書に疲れた頭にはこのうえなく快適である。ここで、ひたすら社民党政治の軌跡を追ったものである。『スウェーデンを検証する』（早稲田大学出版部）と『おんなたちのスウェーデン』（日本放送出版協会）の骨組みはここで思い付いたものである。

「国民の家」というコンセプトを案出して福祉国家の枠組みを策定したペール・アルビン・ハンソンには「スウェーデン型福祉社会の建設者」の名がぴったりする。第二次世界大戦後の経済的繁栄を壮大な福祉社会の建設に投入し、独特の福祉システムを完成に導いたのはターゲ・エランデルであった。彼はその温厚な人柄と政策実行力のゆえに「国民の父」と呼ばれている。そして、スウェーデン型福祉社会の理念を国境線を越えて展開しようとしたウーロフ・パルメ。スウェーデンは積極的な途上国援助と難民受け入れ政策で定評があるが、その伝統を低成長時代にも維持したのは有名である。だが、彼は、家族と映画を観た帰り道で、地下鉄の入口付近で暗殺された。その後パルメと同じく、エランデル学校の優等生と言われる現在の首相イングヴァール・カールソンが後継した。

とにかくスウェーデン社民党の政治家たちはただひたすら書きまくる・話しかける。政策選択肢とリーダー選択肢を有権者の前に提示して、支持を仰ぎ、政権を担当したらひたすら公約を実行すること。政党政治の基本に忠実である。そのぶんだけ研究者にはおっかけ作業が大変になる。外国市場への依存度が高い工業国家でありながら、一八〇年もの間、平和を維持し、さまざまな政治的実験をさりげなく実行してきた国である。比較政治学の研究者としてはそれだけでも十分追いかけてみる価値がある。長期にわたる平和の維持が資料保存大国・スウェーデンを作り上げた。北欧を読むには、平和の長さと同じくらいの気の長い読書が要求される。

（早稲田大学社会科学部教授）

第13回韓日大学出版部合同セミナーに参加して

崔　在　順
（ソウル産業大学出版部）

「韓日大学出版部セミナーに参加しろ」という出版部長のお言葉であったが、日本語といえばひらがなとカタカナだけがやっとわかる程度の私には、苦痛なこと並大抵ではない。なんどもご辞退申し上げたが、秋の旅行ついで、俗離山の山登りついで、大学出版部協会会員との交流もかねて、行くことにした。

建国大学の配慮でスクール・バスを出してもらい、快適な旅行となった。不惑の私とはいえ心は浮き立ち、心の安まらぬ家庭と職場から解放されて、ひさびさに一人になれるのだからと、窓にうつる風景を落ち葉をかき集めるように大事に心の中に収めることとした。

秋も終わりで、黄色く彩られた木の葉と、道端のあちこちに生えた葦のやわらかい揺らめきが晩秋の情緒を感じさせ、懐かしい風景を過去の追憶の情に重ねつつ、思いに浸って眺めている間に俗離山に到着した。紅葉の時期はすでに過ぎていたが、褐色の枯れ葉と松の草緑色など、紅葉に彩られていたときの美しい姿を推測させるに十分だった。

会場は、正二品の松*の血脈を受け継いだような松に囲まれた、松林に位置する俗離山観光ホテルだった。ホテルは外から見る豪華さに比べて古びた建物で、施設ばかりかサービス面でも行き届かないところがあり、受付から部屋の割当て、会議資料の配布など、あらゆることに細かく配慮して準備を進めてきたセミナー関係者は更なる苦労を強いられる結果となった。

通訳については多少不手際だったが、大学一年の学生が担当して韓国人の自負を感じさせた。

エレベーターの動作が遅くひとしきり笑いが漏れたこともあったりした。

セミナーには日本側から十一名、韓国側から六十余名が参加し、初対面の協会員たちとのぎこちない挨拶やら見知った会員たちと会う嬉しさやらで、会場の雰囲気は活気を帯びた。

挨拶そして両国参加者の紹介で開会され、まず韓国側の

主題発表を皮切りにセミナーが始まった。

韓国側でもそれなりに神経を使い、ずいぶん研究して資料を提出したというが、韓日関係とは縁遠い『韓国の出版流通産業の動向と大学出版図書の販売戦略』という主題のもと、韓国出版共同組合への加入を勧める内容だった。

続いて日本側が『日韓大学出版部活動の共通項―実りある交流の前提を探る―』という主題のもと、過去十二回の韓日大学出版部合同セミナーにおいて相互交流した内容を土台に鋭い分析を発表し、今回のセミナーで実益を得るための注意深い戦略は韓国側とは大きな対照をなしていた。

日本側は短い発表の中で、大学出版部の使命と役割そして立場を定義しつつ、それまでの韓国側の主題発表を根拠に、我々が主張した内容を自分たちの権益に符合するように要求してくるものであった。

いいかえれば、韓国側の了解を前提にした上で、形式的なセミナーは廃止して実益のための両国の定例合同図書展開催とか、日本の大学で使用中の英語教科書の翻訳権交渉を韓国の協会側で提議するように、柔らかに自然に勧誘をしてきたのである。

日本側の計画的で組織的な準備に反して、準備したものといえば筆記具と登山服一着だけを持ってきた私の姿勢を反省し、こんな態度で今回のセミナーに参加した韓国の協会員は私一人であることを祈りつつ、次のセミナーでは心掛けをいれかえるべく、いくつか心の中に整理してみることにした。

はじめに、韓日セミナーの目的がもう少し明確にならなければならない。学術的な交流が目的ならば学識のある学者が、親善が目的なら友好関係を結ぶことができる代表者級が……。

日本側の主題発表と参加者を見ると、学術でも親善でもない実務的な会議のようである。ならばこちら側もそれに見合った実務陣を構成して準備をしなければならなかったろう。とにかく韓国側と日本側が同じセミナーを開催しながら互いに違う目的を追及しているような感じを免れなかった。

二つ目には、韓日セミナーの実益を直ちに再考しなければならない。

両国が会った回数よりも我々の立場から合意内容を検討してみて、我々の実益のためのバランスシートを作成し、後の韓日セミナーに積極的に活用して我々の大学の利益のため研究しなければならないだろう。

三つ目に、国際化と開放化に対応することのできる自活力を育てなくてはならない。

大学出版部協会は日本の大学出版部だけでなく、可能なかぎり色々な国の実態を正確に把握し各会員校に資料を提供することによって、大学出版部がきたる開放化の時代に対応できる競争力を育てるようにしなければならない。

最後に、日本の協会側のような積極的な親交の姿勢を学

ばなければならないだろう。初めて会う人には挨拶をし、ためらい無く握手をかわし名刺を渡す姿は、我々大学出版部協会の会員ばかりでなく、世界にはばたこうとする韓国にとってまさに必要な姿勢だと思う。

今度の第十三回韓日大学出版部合同セミナーが、日本側の主張した内容をもとに修正する線で決定されてゆかざるを得なかった韓国の実情を改めて痛感し、韓国の大学出版部が国際化に適応するためには、担う業務に更に専門家にならなければと考えをめぐらせた。

さらに発展した先進技術を韓国の実情に合わせて選択し、積極的に受け入れなければならないとも考えつつ、今日の私自身を戒め、明日こそはとの誓いをもって、晩秋の情趣のなか韓国民族の魂を感じさせる俗離山文蔵台に向かった。その瞬間だけは純粋な人間になり、自然の懐にしばし自然人として生きてみたいと思った。

＊「正二品の松」とは俗離山の名所の一つになっている松の名木。

……

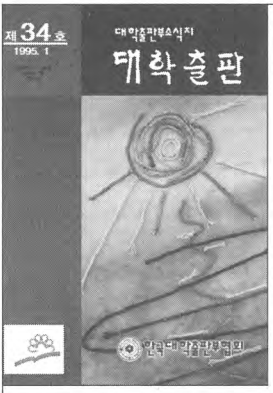
この報告は韓国大学出版部協会の会誌『大学出版』第三十四号（一九九五年一月）に載ったものである。

日本語への翻訳は東京大学出版会編集部の後藤健介氏が行った。

一九八六年春の第一号創刊から九年、『大学出版』も二六号まで継続してきました。この間、報告記事と宣伝中心の内容から、少しずつ読み物も収録するようになり、また創刊当初の年二回発行から、現在では年四回発行へと、質・量ともにパワーアップしてきました。さらに、二三号より全国の有力書店七〇店舗へも配布を始め、協会のＰＲに力を入れています。

一方、隣国に目を向けると、韓国にも大学出版部協会があり、日本と同様に『대학출판』（大学出版）という小冊子を発行しています。

日本の大学出版部協会が一九六三年の協会創立から三二年をかけて二六号を発行したのに対し、韓国の大学出版部協会では一九八一年の協会創立から十三年で三四号を発行したことは、韓国側の「意気込み」が伝わってくるようです。



韓国大学出版部協会の『大学出版』34号。Ｂ５判，36ページで，表紙は４色刷り，ＰＰ加工もしてある。

歩く・見る・聞く
知のネットワーク

コミュニケーションの歴史と未来を考える

ていぱーく（逓信総合博物館）を訪ねて

本や学術書を取り巻く状況が急変している今、ふるさきを訪ね新しきを知る意味で博物館や展示会に行ってみよう、日頃デスクワークの多い編集者も外へ出て、違う分野にふれることでリフレッシュしよう、その上で、これからの本や出版のあり方をちょっと考えようというのが、「歩く・見る・聞く―知のネットワーク」の新コーナーである。

人は自分の意志を他人に伝えたり、情報を交換するために文字を発明し、印刷という多量生産を考え、本の流通システムを作り上げてきた。文字の歴史はコミュニケーションの歴史であり、人類の歩みと未来を考えると必ず文字と本がかかわっている。

第一回は、出版の原点に返ってコミュニケーションの歴史を学び、未来を展望する格好の場所として、逓信総合博物館、愛称「ていぱーく」を訪ねた。

★☆★

「ていぱーく」は我が国唯一の通信情報関係の博物館であり、郵政省、NTT、NHK、KDDが共同で運営している。博物館というとかび臭い匂い、薄暗い部屋、骨董品の置かれた静かなたたずまいを想像するが、ここはずいぶんイメージが違う。郵便に始まり、電話、放送、国際通信など、通信にかかわる全分野について、歴史的資料を単に陳列するだけでなく、放送機器のシミュレーターやコンピュータを利用した参加型ゲームがあるなど、言ってみれば「ていぱーく」は官庁が作ったテーマパークなのである。

従来通りの展示も含め、いずれも面白く工夫されているが、なかでも「コミュニケーション歴史迷路」と称したコーナーが興味深かった。ここではロゼッタストーンやパピルスに始まる文字や、のろしに始まる通信の起源について歴史的に学び、さらにグーテンベルクの活版印刷機の原理模型やグラハム・ベルの電話機の復元モデルなどを実際にさわることができる。そして現在のコンピュータコミュニケーションへのつながりが説明されている。

最近、コミュニケーションといえばコンピュータであり、マルチメディアといえばお祭りのような騒がしさである。

テレコミュニケーションのコーナー

マルチメディアブームがお祭りならば、踊る阿呆と見る阿呆の例ではないが、出版界はフィーバーしている者とかかわりたくないと考える者に二分できる。

ただマルチメディアを直接手がけなくとも、すでに、編集の環境は好むと好まざるとにかかわらず電子化の流れの中にある。組版システムの変化が印刷業界に激震となったことを思うと、次は出版かと誰もが思った。そこにインターネットの登場である。

ネットワーク社会の到来は、家庭の電話がコンピュータの端末になると言われている。SF映画に描かれた未来社会の家庭のようでもあり、コンピュータアレルギーの人には空恐ろしく感じられるかもしれない。しかし、すでに私たちはコンピュータの恩恵を受けて生活している。炊飯器も洗濯機もコンピュータを搭載しているのである。むしろ、コンピュータが電話機なみに誰でも簡単に使える道具になるといえる。そうなれば情報は居ながらにして手に入る。

本の出版が他者と、時間と空間の制約を離れて意志や情報を交換することならば、ネットワークを利用した電子メールやパソコン通信は出版といえる。

特に世界中の人とコミュニケーションがとれ、情報のやりとりができるインターネットの普及を見ると、出版界の本丸にも及ぶ大地震の前兆であることは確実である。

出版の将来について考えながら、「てぃぱーく」で気づいたのは、ネットワークについて語りながら、インターネットやパソコン通信のコーナーがないことである。一方、かつて一大フィーバーしながら下火となったNTTキャプテンはあった。それは現在の状況を反映するかのように、端末のテレビは電源を落とされ、パネル展示もなかった。

官ではなく民、いや草の根によって広まったインターネットは、ここ官庁テーマパークには展示する主体がなく、官主導で広まらなかったキャプテンが寂しく置かれている。ここにも出版の将来とコミュニケーションネットワークの今後を占う鍵がありそうである。

（植村八潮）

てぃぱーく（逓信総合博物館）

〒100 東京都千代田区大手町2-3-1
TEL (03)3244-6811　　月曜休館
交通：地下鉄大手町駅A4・A5出口徒歩1分
JR東京駅下車丸の内北口徒歩10分

大学出版部ニュース

▼専修大学出版局が協会加盟

四月二十八日（金）中央大学駿河台記念館において、一九九五年度通常総会並びに各部会、懇親会が催されました。編集・営業・刊行助成の各部会の後、総会が開かれ、専修大学出版局の加盟が承認されました。専修大学出版局は一九七四年に創設されて以来、人文・社会科学の学術書を中心に出版活動を展開し、一昨年より協会加盟の準備を続けてきました。

これにより一九六三年に十校でスタートした大学出版部協会は二十三校となります。北は北海道から南は沖縄まで、全国各地の加盟校・協力校を加えれば全国五十六大学を網羅する一大学術出版団体として発展してきました。

北海道大学図書刊行会

▼菊池俊彦著『北東アジア古代文化の研究』（A5判・八九六一円）古アジア族とツングース系諸民族により形成された環オホーツク海文化圏の独自の歴史を、発掘と文献資料に基づき、緻密に分類、北東アジア史研究に画期をなす力作。本書はロシアや中国の研究者たちとの、長年にわたる研究交流を踏まえた成果の集大成である。早くも二刷。▼汪志平著『日本巨大企業の行動様式―一九八〇年代の所有と支配』（A5判・三六〇五円）巨大企業の支配類型やメイン・バンクシステム、企業集団の分析にエージェンシー理論やグラフ理論に基づく新たな基準・手法を適用し、その構造と行動の特質を解明する意欲作。鈴木良始著『日本的生産システムと企業社会』（A5判・三九一四円）とともに大学・企業のゼミや研修用テキストとして好評である。▼畠山武道・木佐茂男・古城誠編著『環境行政判例の総合的研究』（A5判・六三八六円）多数の判例の整理・分析を通して、都市環境・自然環境の保全に関連する法制度の現状、問題の所在などを包括的、網羅的にまとめてある。環境問題関係者に格好の手引書。

聖学院大学出版会

▼保谷六郎著『日本社会政策の源流――社会問題のパイオニアたち』（A5判上製　定価三六〇〇円）▼明治・大正初期、日本でもようやく現実問題となってきた社会問題、労働問題に身をもって啓蒙・実践にあたった人々、大隈重信と板垣退助の社会政策への関わり、島田三郎、田口卯吉、佐久間貞一、豊原又男、高野房太郎、鈴木文治らの論説と実践、また、当時の家計調査報告書などを紹介します。調査・家計調査の報告書などから、当時の社会問題と労働者の日常生活の実態をリアルに再現しています。

▼また本書は、これまであまり紹介されていなかった明治期の、土地所有制度改革論の議論と運動を紹介しています。そのなかで『単税太郎』と自称し、国家の税金は地租一本にすべきだ、と主張しながらこの時期の社会問題・運動に参加して日本で没したC・E・ガルストというアメリカ人宣教師を紹介しています。じつは、このガルスト、聖学院には大変縁のある人でして……

▼日本社会政策黎明期の歴史を人物を中心に描くことによって「骨組みだけ描いた歴史書ではなく肉がつき血の通った歴史書になりました」と著者は語っています。

慶應通信

▼野村みどり著『バリアフリー』（価一二〇〇円）超高齢・少子化社会を迎えて高齢者の自立、生活の向上、障害者の社会参加などを進めるためには、これらを実現する上でのバリア（障壁）を除去するバリアフリーの考え方が必要になってきている。本書はこの理念に基づいてこの分野の研究の第一人者である著者が著した概説書で、バリアフリー・デザイン（障壁除去設計）、住宅改善・改造への取り組み、医療・福祉環境のバリアフリー化など、バリアフリー実現のための理念と方策を分りやすく解説している。▼『CDレッスン入門シリーズ―民法／刑法／経済学』（各CD三枚＋テキスト／価各五八〇〇円）日本短波放送において放送された慶應義塾大学の教授による入門講義をもとにCD化したもので、大学の講義のCD化は本邦最初で、各方面から注目されている。民法―池田真朗、刑法―井田良、経済学―塩澤修平の諸教授が担当し、それぞれの専門科目に入る前段階の入門講義としてCDの特性をフルにいかした内容で、初学者にとって理解しやすく、充実したものである。

産能大学出版部

▼人間らしさとは何なのか。外なる価値体系が崩壊した現代にあって、人は何に生きがいを見出せばよいのか。『人間らしさの構造』〈新装版〉（渡部昇一著・一五〇〇円）は、西洋の性悪説文化からの脱出をはかり、性善説の再建を説く。「機能することは快である」という機能快の考えを基盤にして、成長の条件、成長を促すものと阻むもの、苦痛と成長の関係、そして「生きがい」ある人の姿とは、等について独創的に論ずる。▼現在、日本企業のPL法についての研究はかなりなされているが、広告表現、表示、カタログは、PL法の死角といわれ、米国では上位五〇〇社のうち二五％が、広告でPLを問われ、訴訟されている。『PL法時代の「広告・表現」戦略』（山田理英著・二三〇〇円）は、日本の民事・米国のPL判例と日本の広告実例、各種データの数々をあげ、どの表現が、なぜPLを問われるのかの盲点を指摘する。そしてそれをクリアーするため、逆にPL法をプラスに作用させる企業戦略、広告表現戦略の法則を明示する。PL時代の企業のリスクマネジメントの書。

専修大学出版局

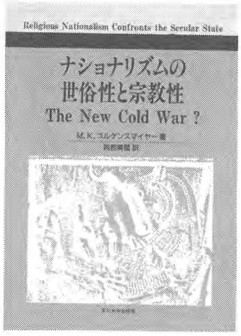
▼中国人のバランス感覚は大したものである。社会主義市場経済という曲芸を、なかなか手際よくおし進めている。それで、小局が出版した『現代中国法令集』（定価二六〇〇円、93・12月）が変容する中国経済に間に合わなくなり、さっそく刊行したのが『現代中国法令集　企業法・税法篇』（定価二五七五円）。▼所有と経営の《両権分離》を図り、国家と生産を再検する新中国の実情がよく分かると、好評である。かつて「私営経済は社会主義公営経済の補完である」と明言した国が、最近は「発展の足をひっぱる国有企業には灸をすえる」と公言。国の変節というより、時代の波は恐ろしく急と畏れ入った。▼国家としては形式主義でありながら、条文は人間の実質に丁寧だとの感想をもったが、絶えず改版を強いられるこの本を小局としても息長く刊行したいものである。

玉川大学出版部

▼究極なるものへの関心から生まれた宗教と文化、社会の秩序やイデオロギーとの関係を追及した二著が出版された。

▼津城寛文著『日本の深層文化序説―三つの深層と宗教―』（四三二六円）　本書は、多岐にわたる日本の深層文化研究を、歴史主義的・文化心理主義的・民俗主義的の三群に分類し、それぞれの対象や方法の特色をまとめて概観する。

▼M・ユルゲンスマイヤー著／阿部美哉訳『ナショナリズムの世俗性と宗教性』（四九四四円）　祭政一致の国家を奉じる「宗教的ナショナリズム」と政教分離の国家を奉じる「世俗的ナショナリズム」の対立と共生の可能性を、中東、南アジア、旧社会主義諸国のケーススタディを提示しながら考察する。



中央大学出版部

▼河野光雄著『社会現象の数理解析―微分・積分と現象のモデル化』（二二六六円）

社会現象をトータルに記述するには、個別運動・集団運動・環境を記述する各変数が必要である。これら変数の特定により現象の背後にある法則の認識に依存し、様々なモデルの作成が可能である。このモデルの出来具合は、モデルを数式に表現し、現実的な条件の下で解いてみれば良い。人間は数学によって自然や社会と対話している。数学が社会の扉を開いてくれるのであれば、数学を学ぶことで自己の世界は一層広がることになる。

▼『地域社会の構造と変容―多摩地域の総合研究―』中央大学社会科学研究所編（五〇四七円）　人口四百万に近い多摩地域を擁しているところに東京都制の一大特徴がある。この点を抜きにして大都市東京について語ることはできない。社会科学研究所の「多摩地域の総合研究」プロジェクトにおいて、経済、社会、政治、行財政、文化などの各分野の専門研究者が多摩地域の複合的な諸相を総合的に捉えようと努めるなかで、地域にねざした大学と学問をつくりあげることを目指す。

東海大学出版会

▼小原秀雄監修『環境思想の系譜（全三巻）』（定価各巻三六〇五円）

①『環境思想の出現』

②『環境思想と社会』

③『環境思想の多様な展開』

アメリカ、ヨーロッパの環境思想の最も核心的な部分を、数百冊の原著から厳選した三九編のアンソロジー。

▼辻哲夫編著『日本の物理学者』（定価三〇九〇円）

西欧から移植された日本の物理学が、どのような形で根を張り、自立していったかを、相対論・量子論を軸に、歴史的資料もふまえて興味深くまとめた。

▼山下昇著『フォッサマグナ』（定価四九四四円）

「大きな溝」とはまさにその通りである。日本列島は、糸魚川―静岡構造線に沿って百キロものずれが生じている。ドイツの地質・地震学者E・ナウマンの博士の〝フォッサマグナ発見〟から一一〇年、ここに「新しい日本列島の地質構造論」が完成し、その謎を解いた。防災意識の高まりの中、基本文献としての意義は大きい。

東京大学出版会

いま、わたし達は、現実の動きはいかなる予想をも越える、と実感せざるをえない。歴史の法則や進歩を自明の如くに語れる雰囲気ではなくなった。だが、そういう時代だからこそ、いま人類が解決を迫られている問題は何か、そうした問題が生じたのはなぜか、歴史的に説き明かすような世界史を描き、来るべき二一世紀を展望することが歴史学に求められていると言えよう。

歴史学研究会編『講座世界史』（全12巻）は一五世紀から現在までを視野にいれ、この間の歴史学の成果を総合し、各国史の集合体をこえた世界史像を描く。

構成―①世界史とは何か　②近代世界への道　③民族と国家　④資本主義は人をどう変えてきたか　⑤強者の論理　⑥必死の代案　⑦「近代」を人はどう考えてきたか　⑧戦争と民衆　⑨解放の夢　⑩第三世界の挑戦　⑪岐路に立つ現代世界　⑫わたくし達の時代（価二四七二円）

いったい歴史はどこに向かっているのだろうか、世界史を知りたいという声があちらこちらから聞こえる。それに応えようとするのがこの講座である。

東京電機大学出版局

▼コンピュータ教科書の編集では、紙媒体に収まらない内容がある。ソフトウェアについては、膨大な行数のプログラムをフロッピーディスクやCD－ROMに収め、付録にする傾向がある。これによりソフトを通して本を効果的に学べる。一方、ハードウェアの本となると付録とするわけにもいかず簡単ではない。

▼並列処理コンピュータは研究や教育の必要性が高いにもかかわらず、高価なため手軽に実験できなかった。作りながら学べることを編集方針とし、読者が実験できるよう安価なハードセットを著者が開発した。数万円でできるので何とか読者に提供したいと思い、メーカーを説得して製造販売してもらうことになった。幸い本もハードも注文が順調である。

小畑正貴著
A５判／定価2472円

東京農業大学出版会

▼『環境緑地学序説』　田村正人著

環境と緑は、人間が生活していく上でたいへん重要であることは、言うまでもない。しかし、その環境と緑あるいは、人間との関係をどのように捉え、保護しあるいは管理し、あるいは創造するか、となると、簡単には答は出ないであろう。

本書は、人類にとって豊かな生活空間を創造してくれる緑の自然環境を、時間的・空間的に調査、分析、評価し、適正に保全、管理、回復、創出するための入門書である。

たとえば、環境という言葉一つを取っても、その意味や語源には、興味深いものがある。又、人間が、環境をどのように感じているかは以外と知っているようで知らない、つまりいくつかの角度からの見方があるようだ。さらに最近よく使われる「環境アセスメント」とはどのような意味で、どうして必要となるのか。

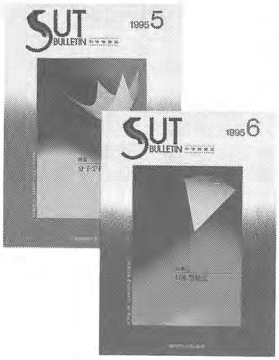
環境緑地といった場合、それは単に草や木が生えている土地という意味ではない。土も川も池も含まれる。昆虫も動物も。それは、そこに生命が宿っているからである。

東京理科大学出版会

明日をひらく科学教養誌――
『SUT BULLETIN』

▼5月号の特集は「分子で探る生物の進化」。自然科学の諸分野がどうしても気になるのが生物進化の問題。ほぼ三〇年前にスタートした、生物の進化をDNA、タンパク質といった情報分子のレベルでとらえる数学、物理学などの最前線の研究を紹介する。

▼6月号は「日本型経営」を特集。日本的経営を支えてきた終身雇用、年功序列は、いま大きな節目を迎えている。日本にとって、「追いつけ、追い越せ」の時代は終り、世界の産業をリードする役割を担う時代に至った。現状の経営システムを総点検し、今後の方向を模索する。

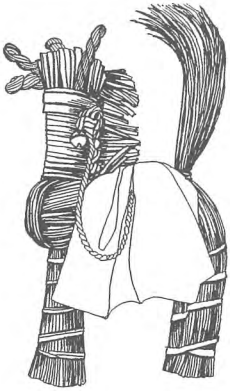


法政大学出版局

▼日本生命財団の出版助成（第15回）を得て、次の大著二点が刊行された。

▼福原敏男著『祭礼文化史の研究』は、祭礼史・祭礼民俗に関する個別研究の成果をふまえて祭礼形態の比較・分類・伝播の考察を多角的・実証的に展開し、日本の祭りを祭礼文化史という総合的視野のもとに位置づける。定価一二八七五円

▼宮崎清著『図説 藁(わら)の文化』は、一千点にのぼる全国の藁製生活用具の精細なスケッチに文化史的考察を加え、日本の豊かな「藁文化」の遺産をくまなく記録にとどめた初の〈藁の文化博物館〉である。ゆりかごから墓場まで、その多様な利用形態を通じて、著者はリサイクル文化の原点をも示そうとする。



B5判・上製貼箱装／定価一四四二〇円

放送大学教育振興会

▼平成八年三月に刊行を予定している図書は七六点。二六〇名を越す執筆陣は、取材、執筆、脱稿、校正にと、暑さにめげずに大忙し。

▼大執筆者陣を擁する図書も多い。十二人の『高齢社会の生活設計』を筆頭に十一人の『食生活の現代的課題』、九人の『食物の特性とその役割』、八人の『朝鮮の歴史と文化』等、話題作がズラリ。執筆者二人以上は四六点。一方、一人で奮闘執筆中の中にも、関心が高い図書がズラリと並ぶ。『宗教の哲学』、『南アジアの歴史と文化』、『古代ギリシャ・ローマの文学』、『民族音楽学理論』、『日本音楽の基礎概念』をはじめ、『家庭生活の経済』、『サービス産業論』、『日本の技術と産業の発展』、『日本の経営・欧米の経営』、『現代の行政』、『都市計画論』、『材料工学と産業・社会』、『統計的決定』、『データとデータ解析』、『情報基礎管理学』、『固体地球』等、三〇点を数える。

▼図書刊行計画の基となる「平成九年度の放送大学の開講科目」七七科目は、六月中旬に行われた、放送大学の教授会で決定された。

明星大学出版部

▼井関正昭著　『日本の近代美術入門 1800～1990』

本書は日本の近代美術についての入門書、そして学生の教材として書いたものである。入門書で教材であるから、いわば大雑把な概説書である。概説書であるから、歴史の中の個々の現象や個々の芸術家についての詳細な知識は、無数といえるほどある他の研究書、論考や評論によって学んでいただかなければならない。

ただ概説書としては、歴史の一つの流れをそれぞれの時代相の中から抽出して独断や偏見も交えたが、できるだけ特徴的な部分に注目して何とか構成したつもりである。特徴的な部分というのは、この流れの中にあるリアリズムの課題と考え、これに焦点をあてることにした。歴史の切り口にはいろいろな方法があるはずだが、日本の近代美術におけるリアリズムの課題は最も切実な部分にちがいない。

また、本書の標題のサブタイトル1800～1900は、決して日本の近代美術が一八〇〇年から始まったと規定したわけではない―あとがきより―

早稲田大学出版部

▼日本生命財団出版助成（第15回）を受けて『子守学校の実証的研究』（長田三男、定価二〇六〇〇円）を刊行した。子守学校とは正規の学校教育を受けられない子女に初等教育を授けた施設で、その開設から廃止にいたるまでの実態を膨大な史料を駆使して体系的に究明している。

▼「ワセダ・リブリ・ムンディ」のEU（欧州連合）編全3巻（定価各二八〇〇円）を刊行した。『EU統合の系譜』（大西健夫・岸上慎太郎編）、『EU制度と機能』（大西健夫・中曽根佐織編）、『EU政策と理念』（大西健夫・岸上慎太郎編）は、共同体をつうじて二一世紀へ向けた歴史的な実験を試みるEUの全貌を最新資料をもとに明らかにする。

名古屋大学出版会

▼ピーター　B・ハーイ著『帝国の銀幕―十五年戦争と日本映画』（定価四九四四円）戦時下、人々は映画に何を見たのか？　全体主義統制の圧力下における映画産業と創造性のあり方を凝視するとともに、「文化」映画、「ヒューマニズム」戦争映画、精神主義映画等、――『五人の斥候兵』と『ハワイ・マレー沖海戦』を二つの頂点とする――戦争プロパガンダ映画の発展を通して「大日本帝国」の戦争と社会を鮮やかに描き出した力作。

▼石川一三夫著『日本的自治の探究―名望家自治論の系譜』（定価三〇九〇円）「地方の時代」と言われる現在、福沢諭吉、陸羯南、徳富蘇峰、植木枝盛等、近代黎明期の知識人の言説を通して日本地方自治思想の原点とその系譜を明らかにする。

▼Ph・ワロン他著／加藤義信・日下正一訳『子どもの絵の心理学』（定価二九八七円）子どもの絵にはどんな心の世界が隠されているのか？　発達心理学によるアプローチを中心に、臨床的応用やコンピュータの利用に到るまで研究の現況をバランスよく鳥瞰する。

京都大学学術出版会

▼『アジアにおける宗教の再生―宗教的経験のポリティクス』田辺繁治編著

一九八〇年以降、世界史的意味での政治的イデオロギーが衰弱するにつれて、宗教がいたるところで再生・再編制され、さまざまな階層の人々に浸透してきた現象は、近年多くの研究者によって指摘されている。

この宗教の再生・再編制を、単に人々の断片化と不安を促進する「近代化」の反動としてとらえる一般的な見方から離れて、本書はそれを、宗教的経験のポリティクスの観点から考察する。つまり、アジアにおける急速な近代化によって大きく変動しつつある社会システムのゆらぎと再統合の動向に着目し、それに伴う宗教現象を含む混沌とした文化の連動と対応を、人々が新たな社会関係や秩序、また個人のアイデンティティを確立するための適応戦術という視点から、それに分析のメスをあてるのである。

本書は、アジア各地の一七の事例を挙げ、仏教など四大世界宗教から、伝統的儀礼や霊媒系新宗教まで、宗教的経験の実相を人類学と宗教学から追いつめる。

大阪経済法科大学出版部

▼『フランス人民戦線と議会―立法過程の計量分析―』ポール・ウォーウィック著、向井喜典・岩村等訳

一九三〇年代の世界経済恐慌を契機とするファシズムの台頭の時期にフランスで経験された人民戦線運動の高揚と衰退の諸過程がもつ歴史的意味について、日本でも読者層の関心が高まっている。これまで欧米諸国や日本においては、人民戦線政府の政策形成過程についての議会史分析のたち入った研究成果は極めて少ないと言わざるを得ないのだが、本書は、フランス人民戦線政府の立方過程を計量解析した貴重なものである。

▼『朝鮮半島の非核化と日本』韓桂玉編著

世界は、東西冷戦体制終焉後の新たなる秩序形成という重要な課題を突き付けられている。朝鮮半島の核問題は、こうした時代背景の中で、朝鮮半島及び日本を取り巻く東アジア地域の軍縮・緊張緩和ひいては平和体制の実現にとって極めて重要な意味をもっている。本書は、昨今とりわけ内向き指向の強い日本社会に、再考を促すものとなろう。

関西大学出版部

▼廣田君美著『生きがいの創造と人間関係』（定価一七〇〇円）「生きがい」を育てることは、生への重要な意味づけとなる。そこでは当然、あらゆる側面での円滑な「人間関係」が必要とされる。本書は「生きがい」と「人間関係」のメカニズムに迫るとともに、社会や職場、学校や家庭などで、心と心が通い合った相互理解の人間関係を確立し、すばらしい人生を実現させるための示唆に富む指針を提供する。「現代社会と人間関係」「職場の活性化とリーダーシップ」「高齢化社会を生きぬくために」「大阪文化と大阪人と」ほかの6部構成▼原田聖二著『両大戦間イギリス経済史の研究』（定価四五〇〇円）本書はともすれば暗い色調でしか描かれなかった両大戦間イギリス経済史像を「楽観派」の目から再構成し、新興産業への転換、失業の多面性、鉄道の再編成、保護関税の導入など、それぞれの中で政策移行の様相を描き出すことにより、レッセ・フェールからマネイジド・エコノミーへの転換期として捉え、ナチスやニューディールと異なる国家と経済のあり方を提示する。

九州大学出版会

▼坂田完治『鄧小平の世界―反証　天安門事件』四六判・三〇二頁・二四七二円。天安門事件が照射するポスト鄧小平の中国。本書は社会主義イデオロギー面を含め、事件の全体像、とくに政治過程、軍事過程の解明を図ろうとしているが、執筆の主たる動機は中国共産党の下した事件像、つまり「党がつくった歴史」に対する反証にある。鄧小平を欠く時代に、天安門事件は、ひときわ重く中国共産党にのしかかるだろう。▼金城須美子『宮良殿内・石垣殿内の膳符日記―近世沖縄の料理研究史料』B5判・七七六頁・二〇六〇〇円。日本生命財団助成図書。膳符日記は、琉球王朝時代の士族階級の冠婚葬祭の礼式および献立記録であり、琉球の伝統料理や食生活史研究、さらに今日の長寿県沖縄の食の原点を知る最も基礎的な資料である。本書は日記の影印、翻刻、注釈と献立構成、食材料、料理法、日本料理との関連性を分析・解説する。▼松永和人『左手のシンボリズム』A5判・二二四頁・三二九六円。わが国宗教文化に見る左手・左足・左肩の習俗の構造とその象徴的両義性を明らかにする。

流通経済大学出版会

▼さきにご案内のとおり、流通経済大学と中国を代表する物的流通の専門大学である北京物資学院とは、昨年来から両校間で「中国における物流の現状と課題」について共同研究を実施し、その研究成果を平成七年度中に当会から出版することとしている。これと並行して、共同研究成果のうち流通経済大学の研究者が実施した部分は、中国における物流分野の研究者に対する資料に供するため、現在中国語に翻訳中である。翻訳が完了次第、中国語版冊子を発行する予定である。▼流通経済大学社会学部は、昨年度に実施した竜ケ崎市における地域住民の福祉意識に関する社会調査を、このほど報告書として取りまとめた。内容は、地域住民の福祉意識について、福祉に関する関心度、生活環境の評価、子供との同居、老人介護、行政の福祉政策に対する評価や要望など、さまざまな角度からアプローチした社会調査である。この調査については、竜ケ崎市役所と竜ケ崎市社会福祉協議会の全面的なご協力を得たものである。

大阪大学出版会

それぞれ趣の異なった三点ができた。助成金を得た質の高い研究書と、大学でなされている先端研究を社会にわかりやすいかたちで紹介する啓蒙書、もうひとつは科学における古典の完訳である。▼山中永之佑著『近代市制と都市名望家―大阪市を事例とする考察』（定価八二四〇円）戦前の都市支配の中枢が「名望」家の手から行政スペシャリスト官僚である市長へ移行する過程を検証した日本近代市制の法史学的研究書。日本生命財団の助成を得て刊行。▼阪大微生物病研究所編『病気のバイオサイエンス―生命研究のフロンティア』（定価二八〇〇円）いま話題の遺伝子診断と遺伝子治療とは？　市民の不安感に応え、いのちを守る研究のあゆみとフロンティアを平易に解説する。▼齋藤日向監修、竹田正一郎・北畠克顕訳『パストゥール・ビールの研究』（定価一〇、三〇〇円）近代科学・医学の礎を築いたパストゥールの没後百年記念出版。一八七六年刊の初版本からの完訳。かのリービッヒとの大論争には、いまも興味つきない面白さがある。

新刊案内 '95・4～'95・6

（表示価格は税込みです）

■北海道大学図書刊行会
医療保険と年金保険―フランス社会保障制度における自律と平等― 加藤 智章 八二四〇円
北の住まいを創る 菊地弘明・飯田雅史 三二九六円
ソヴィエト農業一九一七―一九九一―集団化と農工複合の帰結― Z・A・メドヴェーヂェフ／佐々木 洋訳 六六九五円
北の自然を守る 八木 健三 二〇六〇円
■聖学院大学出版会
日本社会政策の源流 保谷 六郎 三六〇〇円
■慶應通信
私の金融論 板倉 譲治 二四〇〇円
バリアフリー 野村みどり 一二〇〇円
はじめての経済学 岡田泰男・野澤素子・村田年共編 一八〇〇円
日本外交と中国―一九四五～一九七二― 添谷 芳秀 三八〇〇円
民法体系ノート 松尾 弘 二二〇〇円
東洋的ロレンス論―即今の形而上学― 海野 厚 二九〇〇円
解説宇宙法資料集 編集代表 栗林 忠男 四二〇〇円
CDレッスン 経済学入門 塩澤 修平 五八〇〇円
CDレッスン 民法入門 池田 真朗 五八〇〇円
CDレッスン 刑法入門 井田 良 五八〇〇円
■産能大学出版部
成功者は知っている 藤本 隆一 一五〇〇円
アジアビジネス失敗から学ぶ成功する法 増田 辰弘 一八〇〇円
それでも学歴を追い求めるのか 森 均 一五〇〇円
真実の「般若心経」 巽 直道述／越智宏倫記 一五〇〇円
新・実戦広告戦略 八巻 俊雄 二八〇〇円
情報文明の行動科学 嘉味田朝功 二三〇〇円
人事部から好かれる人嫌われる人 佐藤 建 一五〇〇円
営業大変革の時代 飯塚 藤雄 一五〇〇円
わくわく接客ときめき販売 水尾 順一 一五〇〇円
マーフィーの宇宙律 しまず こういち 一五〇〇円
新装版「人間らしさ」の構造 渡部 昇一 一五〇〇円
ホンダ流「課題達成型」目標管理 浅江 季光 二〇〇〇円
21世紀の情報生活入門 川勝久／R・ギャリティ 一六〇〇円
生きてゆくのがつらくなったとき 藤本 幸邦 一五〇〇円
PL法時代の「広告・表現」戦略 山田 理英 二三〇〇円
■専修大学出版局
現代中国法令集 企業法・税法篇 宮坂 宏編訳 二五七五円
増補 現代中国法令集 宮坂 宏編訳 三九一四円
■玉川大学出版部
健康教育序説―生活と健康― 野田雄二編著 二八八四円
リズム遊びとムービング 吉本 澄子 二〇六〇円
コモン・グッドへの教育―カリキュラムの道徳哲学― 岡本道雄・市村尚久訳 四九四四円
日本の深層文化序説―三つの深層と宗教― 津城寛文 四三二六円
外来思想と日本人―大伴旅人と山上憶良― 谷口 茂 二四七二円
ナショナリズムの世俗性と宗教性

M・ユルゲンスマイヤー／阿部美哉訳　四九四四円
異文化摂取と教育改革　多田建次・多田廣子　二四七二円
教育の比較文化誌　石附　実　二八八四円
子どもという思想　矢野　智司　二四七二円
大学はどこから来たか　どこへ行くのか　永井道雄編　二四七二円
信念・道徳・教育　W・ブレッィンカ／小笠原道雄・坂越正樹監訳　五九七四円
教育目的の比較文化的考察　沼田　裕之　四三二六円
学問の中の私　村田　全編　二八八四円
生命科学からみた人間健康理論　三石　績　一八五四円

■中央大学出版部

現代日本の金融経済―バブル経済と平成不況を中心に―　衣川　恵　二六七八円
The Grand Design of America's Justice System　小島　武司　他編　四六三五円
アジアの台頭と日本の役割　中央大学経済研究所編　二七八一円
日本ＯＤＡの総合的研究―タイにおける事例―　吉沢四郎・高柳先男編著　三三九九円
地域社会の構造と変容―多摩地域の総合研究―　中央大学社会科学研究所編　五〇四七円
法律家を目指す諸君へ―一九九五年度版―　中央大学法職講座運営委員会編　二〇六〇円
フランス私法講演集　G・レジェ　他／山野目章夫　他訳　一五四五円
社会現象の数理解析―微分・積分と現象のモデル化―　河野　光雄　二二六六円

■東海大学出版会

道徳についての思考―倫理と合理性―　ウィリアム・K・フランケナ／飯田亘之ほか訳　二三六九円
図書館建築22選　図書館計画施設研究所編　四六三五円
地球の半径　星野　通平　一六四八円
環境思想の出現〈環境思想の系譜1〉　小原秀雄監修／阿部治ほか編・解説　三六〇五円
環境思想と社会〈環境思想の系譜2〉　小原秀雄監修／リチャード・エバノフほか編・解説　三六〇五円
環境思想の多様な展開〈環境思想の系譜3〉　小原秀雄監修／鬼頭秀一ほか編・解説　三六〇五円
宇宙のデータブック　比田井昌英・寿岳潤・高瀬文志郎　一五四五円
日本の物理学者　辻哲夫編著　三〇九〇円
地球内部の構造と運動〈新版地学教育講座⑤〉　地学団体研究会編　二五七五円
大気とその運動〈新版地学教育講座⑭〉　地学団体研究会編　二五七五円
我等の世界観（復刻版）　望星学塾編　二〇六〇円
環境理念と管理の研究　宇都宮深志　四六三五円

■東京大学出版会

知の論理　小林康夫・船曳建夫編　一五四五円
夜の鼓動にふれる―戦争論講義―　西谷　修　二〇六〇円
結婚〈東京大学公開講座60〉　二三六九円
運動するから健康である〈ＵＰ選書269〉　宮下　充正　一五四五円
文明の衝突か、共存か〈ＵＰ選書270〉　蓮實重彦・山内昌之編　一八五四円
中世朝廷訴訟の研究　本郷　和人　四九四四円
経済法概説〔第2版〕　松下　満雄　三七〇八円
日本企業の研究開発システム―戦略と競争―　大阪市立大学経済研究所／明石芳彦・植田浩史編　三九一四円
生存時間解析―ＳＡＳによる生物統計―　大橋靖雄・浜田知久馬　三五〇二円
格子形成法とコンピュータグラフィックス〈数値流体力学6〉　数値流体力学編集委員会編　四三二六円
枢密院会議議事録79・昭和篇37　国立古文書館所蔵　一六四八〇円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇61　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇85・86　国立国会図書館所蔵　各一六四八〇円
ゼミナール宇宙科学　戎崎　俊一　三二九六円
講座世界史1―世界史とは何か―　歴史学研究会編　二四七二円
多元的世界の接触の転機
イスラムとロシア―その後のスルタンガリエフ―　山内　昌之　二二六六円
〈中東イスラム世界1〉
アフリカからの旅立ち〈モンゴロイドの地球1〉　赤澤　威編　二六七八円
教育改革のゆくえ―自由化と個性化を求めて　天野　郁夫　一七五一円
〈UP選書271〉
花の性―その進化を探る―　矢原　徹一　三九一四円
地球温暖化問題に答える〈UP選書272〉　小宮山　宏　一七五一円
圧縮性流体解析〈数値流体力学シリーズ2〉　数値流体力学編集委員会編　四七三八円
枢密院会議議事録80・昭和篇38　国立古文書館所蔵　一六四八〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇62　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇87・88　国立国会図書館所蔵　各一六四八〇円
講座世界史2―近代世界への道―　変容と摩擦　歴史学研究会編　二四七二円
日本人の中東発見―逆遠近法のなかの比較文化史　杉田　英明　二六七八円
〈中東イスラム世界2〉
学びへの誘い〈学びと文化1〉　佐伯・藤田・佐藤編　一八五四円
言葉という絆〈学びと文化2〉　佐伯・藤田・佐藤編　一八五四円
南太平洋との出会い〈モンゴロイドの地球2〉　大塚柳太郎編　二六七八円
社会科学再考―敗戦から半世紀の同時代史　石田　雄　二八八四円
価格変動のマクロ経済学　福田慎一　三九一四円
強制履行の法学的構造　森田　修　七四一六円
罪と罰の法文化史　西川洋一・新田一郎・水林　彪編　五九七四円
ケガレの人類学―南インド・ハリジャンの生活世界　関根　康正　五五六二円
エネルギー変換〈東京大学機械工学5〉　斎藤孝基・飛原英治・畔津昭彦　三五〇二円
熱学入門―マクロからミクロへ―藤原邦男・兵頭俊夫　二八八四円
燃焼・希薄流・混相流・電磁流体の解析　三九一四円
〈数値流体力学5〉　数値流体力学編集委員会編
The Political Economy of Japan Money　中尾　茂夫　四九四四円
枢密院会議議事録81・昭和篇39　国立古文書館所蔵　一六四八〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇63　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院会議録・昭和篇89　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
大日本史料　第五編之一　東京大学史料編纂所編　一五四五〇円
大日本史料　第十二編之一　東京大学史料編纂所編　一五四五〇円
■東京電機大学出版局
第3級ハム教室〈アマチュア無線技士国家試験〉　吉川　忠久　一五四五円
高校生のためのポケコン―シャープ版　諸房　岑他　九五〇円
ウェーヴレットビギナーズガイド　CD―ROM付　榊原　進　四一二〇円
コンピュータ言語と処理〈新・数学とコンピュータシリーズ〉　片桐重延・白石和夫　一七五一円
数学ソフトによる曲線と図形処理
〈新・数学とコンピュータシリーズ〉　片桐重延他　一八五四円
■東京農業大学出版会
環境緑地学序説　田村正人著　八〇〇円

■東京理科大学出版会

■法政大学出版局

恋愛礼讃―中世・ルネサンスにおける愛の形―　M・ヴァレンシー／沓掛良彦・川端康雄訳　四九四四円

反射炉Ⅰ・Ⅱ―大砲をめぐる社会史―　〈ものと人間の文化史77―Ⅰ・Ⅱ〉金子　功　各一九五七円

言語芸術・言語記号・言語の時間　R・ヤコブソン／浅川順子訳　四〇一七円

空間、時間、そして人類―時空認識の人類史―　G・クラーク／服部研二訳　一九五七円

意味と力―社会動学論―　G・バランディエ／小関藤一郎訳　四三二六円

エイジズム―優遇と偏見・差別―　E・B・パルモア／奥山・秋葉・片多・松村訳　二九八七円

文書のライフサイクル　作山　宗久　二九八七円

悪党と海賊―日本中世の社会と政治―　網野　善彦　六九〇一円

シェイクスピアにおける交渉　S・グリーンブラット／酒井正志訳　三五〇二円

スパイスの歴史―薬味から香辛料へ―　〈新装版〉山田憲太郎　二三六九円

文芸博物誌　〈新装版〉金関　丈夫　二三六九円

ハイデガーとヘブライの遺産―思考されざる債務―　M・ザラデル／合田正人訳　三九一四円

エクリール―政治的なるものに耐えて―　C・ルフォール／宇京頼三訳　四四二九円

和　船Ⅰ〈ものと人間の文化史76―Ⅰ〉石井　謙治　二九八七円

和　船Ⅱ〈ものと人間の文化史76―Ⅱ〉石井　謙治　二四七二円

草木布Ⅰ・Ⅱ　〈ものと人間の文化史78―Ⅰ・Ⅱ〉竹内淳子　各二四七二円

すごろくⅠ〈ものと人間の文化史79―Ⅰ〉増川　宏一　二八八四円

すごろくⅡ〈ものと人間の文化史79―Ⅱ〉増川　宏一　二九八七円

各国警察制度の再編〈法政大学現代法研究所叢書14〉　吉川経夫編　三九一四円

絵画を見るディドロ　J・スタロバンスキー／小西嘉幸訳　一九五七円

■放送大学教育振興会

■明星大学出版部

社会科教育　福島　茂明　二三六九円

■早稲田大学出版部

ドイツ中世社会史の研究　野崎　直治　三四〇〇円

生活文化の時代―新しい感性を求めて―　岡沢憲芙監修・生活文化サロン編　二四〇〇円

源氏物語と平安文学　第4集　早稲田大学大学院中古文学研究会編　七五〇〇円

子守学校の実証的研究　長田　三男　二〇六〇〇円

エリザベス朝喜劇10選　第Ⅱ期・全10巻

7　女の勝利　またの名　じゃじゃ馬馴らしが馴らされて　J・フレッチャー／岡崎凉子訳　二八〇〇円

叢書　ワセダ・リブリ・ムンディ

⑰韓国の経済―革新と安定の開発戦略―　金宗炫・大西健夫　三〇〇〇円

⑬EU　統合の系譜　大西健夫・岸上慎太郎編　二八〇〇円

⑭EU　制度と機能　大西健夫・中曽根佐織編　二八〇〇円

⑮EU　政策と理念　大西健夫・岸上慎太郎編　二八〇〇円

平和研究　第一九号　特集・Peaceful Change―平和的変革へ―　日本平和学会編　三二〇〇円

下戸塚遺跡の調査　第3部／古代編―早大安部球場跡地埋蔵文化財調査報告書―　早大校地埋蔵文化財調査室編　二五〇〇円

早稲田大学蔵資料影印叢書　国書篇第三期　第38巻　中世近世紀行集　津本信博編　一八〇〇〇円

早稲田大学蔵資料影印叢書　洋学篇第一期　第9巻　宇田川玄随集　Ⅰ　杉本つとむ編　二八〇〇〇円

■名古屋大学出版会
経済思想史―社会認識の諸類型―　大田一廣・鈴木信雄・高哲男・八木紀一郎編　二八八四円
現代の思想と人間　久保田勉・稲垣良典編　二二六六円
Fortran 77 入門　岩田晃・岡田稔・松本哲也・池田幹男　八二四円
御雇外国人ローレツと医学教育―愛知県公立医学校におけるドイツ医学の受容―　田中　英夫　五六六五円
子どもの絵の心理学　Ph・ワロン他／加藤義信・日下正一訳　二九八七円
日本的自治の探究―名望家自治論の系譜―　石川一三夫　三〇九〇円
帝国の銀幕―十五年戦争と日本映画―　ピーター　B・ハーイ　四九四四円

■京都大学学術出版会
アジアにおける宗教の再生―宗教的経験のポリティクス―　田辺　繁治編著　四六〇〇円
アルケー　一九九五―関西哲学会年報3　関西哲学会編　一五〇〇円

■大阪経済法科大学出版部
民族問題の歴史的位相―インターナショナリズムの敗北・されど―　尾崎　彦朔　三六〇五円
朝鮮半島の非核化と日本　韓桂玉編著　二七八一円
フランス人民戦線と議会―立法過程の計量分析―　ポール・ウォーウィック著　向井喜典・岩村等訳　四三二六円

■関西大学出版部
お金の見聞録　佐々木　宏之　一八〇〇円
生きがいの創造と人間関係　廣田　君美　一七〇〇円
両大戦間イギリス経済史の研究　原田　聖二　四五〇〇円

■九州大学出版会
経済学的手法の現在―久留米大学経済学部創設記念論文集―
いま、世界は―世紀末の経済と社会―　木下悦二編　四六三五円
左手のシンボリズム　原田康平編　二二六六円
経済・経営構造の国際比較試論　松永　和人　三二九六円
九州大学国際経済構造研究会編　三九一四円
本能行動とゲシュタルト知覚〔新装版〕　大村　敏輔　三三九九円
鄧小平の世界―反証　天安門事件―　坂田　完治　二四七二円
経済計画の理論　G・M・ヒール／大住圭介訳　四九四四円
ある女性数学者の回想　森本　治枝　二〇六〇円
宮良殿内・石垣殿内の膳符日記―近世沖縄の料理研究史料―　金城須美子　二〇六〇〇円

■流通経済大学出版会
近代市制と都市名望家―大阪市を事例とする考察―　山中永之佑　八二四〇円

■大阪大学出版会
病気のバイオサイエンス―生命研究のフロンティア―　大阪大学微生物病研究所編　二八〇〇円
パストゥール・ビールの研究　齋藤日向監修／竹田正一郎・北畠克顕訳　一〇三〇〇円

●製作の現場から　11

枡目の呪縛から解脱せよ

▼悪筆である。金釘流であるのはもちろんだが、それに加えて文字の大きさが定まらない。それ以上に文字列の方向が定まらない。性格は素直だし、曲がったことは大嫌いなのに、一体なぜなのだろうと思う。筆者の夜の行動様式に似ているという人もいるが、本人としては、そんなつもりはない。

▼そこで、最近はもっぱらワープロのお世話になっているが、それ以前は原稿用紙に頼っていた。手紙を書くときは航空便用の薄葉紙の下に原稿用紙を敷いて、枡目が透けて見えるようにして書いた。葉書に枡目をコピーして使っていたこともある。達筆・能筆の方々にとっては理解に苦しむことだろうが、事実なのだからしかたがない。

▼つまり、原稿用紙にはそれだけの機能性があるということだ。文字の大きさを統一し、方向を定めるという機能である。さらに出版社にとっては、本来の目的である字数を計算するという機能もある。筆者の所属する出版部では以前、通常の20字×10行のものに加えて、25字×8行の原稿用紙を作成したことがある。行間を広くして書き込みをしやすくするためだが、これなどは拡張機能といえるかも知れない。

▼その機能性のゆえか、詩人や作家の中には、原稿用紙に書くのを嫌う人もいるという。原稿用紙は使用するが、枡目は無視するという人もいるらしい。ワープロ嫌いにも一脈通じるものがあるのではなかろうか。逆にいえば、枡目好きはワープロ好きでもあるようだ。25字×8行の原稿用紙の作成を提案した著者はすでに他界されたが、ワープロを使い始めたのはかなり早かったと記憶している。

▼活字も枡目だからである。活版の活字はもちろん、電算写植の字母も正方形の用紙に書く。印刷された状態では目に見えないけれど、枡目は厳然として存在するわけだ。だから、枡目へのこだわりは本づくりの仕事にとって、ある程度は、そして現段階では、必要条件といえるかも知れない。ただし、活版の場合には（印刷所の手数の問題もあって）本文活字を単位とするレイアウトが主流だったが、電算になってからは歯数によるきめ細かなレイアウトに変わりつつある。DTPになると、さらに様相が変わってくる。

▼まずは版面の設定。DTPには何字詰めという概念はない。版面は天地左右のマージンによって設定する。さらにDTPは書体によって、文字間の許容値が変化する。同じポイント数の文字であっても、書体が変われば一行に収まる字数も変わってくる。つまり枡目は、文字列の進行方向にのみ整列する。当然、何字下げという設定では行頭を揃えることはできない。9ポイント×2のスペースと18ポイントのインデント設定は同じではないのだ。

▼活版が原稿用紙だとすれば、DTPは便箋にたとえられる。当然、枡目好きの人間にとっては抵抗がある。しかし、もともと日本語の活字が正方形になったのは、それが最も美しいからではなく、最も扱いやすかったからに違いない。デジタル化によって技術的な問題がなくなれば、プロポーショナルの日本語フォントも登場してくるだろう。文字を扱うわれわれの側も、そろそろ枡目の呪縛から解脱すべきなのかも知れない。いささか飛躍しすぎかもしれないが、方眼紙に絵を描く画家がおそらく存在しないのも、原稿用紙を嫌う詩人がいるのも、枡目へのこだわりが創造的な行為にとってマイナスに働く場合があるからであろう。

▼余談であるが、高級な碁盤の枡目は日本刀の刃に黒漆を塗って、一気に押しつけて引くのだという。定規は使わない。正確な枡目を作るのに、定規よりも人間の目を信じるというのは面白いと思う。

（枡目ディア）

ISSN 0913-3305

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362 埼玉県上尾市戸崎1－1 TEL. 048-725-0324 FAX 048-725-0324
慶應通信	〒108 東京都港区三田2－19－30 TEL. 03-3451-3584 FAX 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2－16－5 自由が丘サンビル TEL. 03-3724-9101 FAX 03-3717-4346
専修大学出版局	〒101 東京都千代田区神田神保町3－8－3 専修大学別館 TEL. 03-3263-4238 FAX 03-3263-4239
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園6－1－1 TEL. 0427-39-8935 FAX 0427-39-8940
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742－1 TEL. 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151 東京都渋谷区富ヶ谷2－28－4 TEL.03-5478-0891 FAX 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷7－3－1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町2－2 TEL. 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘1－1－1 TEL.03-5477-2562 FAX 03-5477-2643
東京理科大学出版会	〒162 東京都新宿区若宮町19 TEL. 03-3235-5692 FAX 03-3235-9632
法政大学出版局	〒162 東京都新宿区市谷田町2－14－1 TEL. 03-5228-6271 FAX 03-5228-6010
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門1－14－1 郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2－1－1 TEL. 0425-91-9979 FAX 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町1－103 TEL. 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-01 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX 075-761-6182
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺6－10 TEL. 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 大阪府吹田市山手町3－3－35 TEL. 06-388-1121 FAX 06-389-5162
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎7－1－146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX 092-641-0172
流通経済大学出版会(準会員)	〒301 茨城県龍ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011
大阪大学出版会(準会員)	〒565 大阪府吹田市山田丘1－1 大阪大学事務局内 TEL. 06-877-1614 FAX 06-877-1614

大学出版(第26号) '95夏 平成7年7月1日発行 発行所 大学出版部協会
〒113 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版会内 電話 03-3812-2111 (内)7954
頒布価格100円 〒共